

周囲に都市化の波が押し寄せていたことが判る。自然と共に暮らし学ぶという生活は、ハワードの田園都市論に象徴されるように、近代という時代の求めた理想的都市の姿であった。この学園町も規模等は及ばないものの、理念としてはこの田園都市論に通じたものがあつたのである。しかし、日本の現実の近代化の中では、そのような環境は失われてしまうのが常であったし、いまだ、わが国では、都市や町づくりにおいて自然を求めすることは時代の流れに逆行するものでしかないよう受け取られるのが一般的である。ただ、現状の南沢は、他の住宅地と比較をすれば、羽仁吉一が嘆くほど、ひどい環境と化したとはいえない。かつての松林だった頃を偲ぶことができるほど緑豊かで、住環境としては極めて良好な住宅地といえるし、戦後に建てられた住まいが多いが、庭先の老木を残すよう住宅の配置を意識的に後退させたもの(図②)や生け垣を築しんでいる住まいも見られる。その意味では、羽仁夫妻が当初この南沢学園町に求めた自然と共生できる街、そして、都市は微かながらも確実にこの地に継承されているように思える。その意味で、今、残されている緑豊かな住環境をこれからも維持してもらいたいと願わずにはいられない。

本稿を作成するにあたり、遠藤新の研究者である宮井正隆・井上祐一両氏、自由学園教師であつた吉川奇美氏および自由学園附属図書館の小島・遠藤氏にお世話になつた。記して感謝したい。

- 註
- \*1 『近代読者の成立』——前田愛 岩波同時代ライブラリー
  - \*2 『創立者の歩んだ道』——婦人之友社
  - \*3 『創立者の歩んだ道』——
  - \*4 『自由学園の歴史』1——
  - \*5 『自由学園明日館実測図』——谷川正己 彰国社
  - \*6 『婦人之友社学園町経営部』
  - \*7 『東京は昭和一四年版、他は昭和一八年版を使用』
  - \*8 『身辺雑記』『婦人之友』大正一五年八月号
  - \*9 『学園新聞』昭和九年六月五号
  - \*10 『学園新聞』昭和九年六月五号
  - \*11 『婦人之友』昭和一〇年二月号
  - \*12 『南沢冬日礼讃』『婦人之友』昭和九年二月号
  - \*13 『南沢今昔』『婦人之友』昭和三〇年九月

参考文献

- 『自由学園の歴史』I・II 自由学園女子部卒業生会編 一九八五、一九九一年
- 『創立者の歩んだ道』婦人之友小史 婦人之友社、一九七〇年
- 『雑司ヶ谷短信 上・下』羽仁吉一、婦人之友社、一九五六年
- 『近代読者の成立』前田愛、岩波書店、一九九三年
- 『自由学園の教育』羽仁恵子、一九七二年
- 『建築家 遠藤新作品集』遠藤新生誕百年記念事業委員会、一九九一年
- 『自由学園明日館実測図』日本建築学会自由学園明日館実測小委員会
- 『東久留米市史』東久留米市史編さん委員会、一九七九年
- 『保谷市史』保谷市史編さん委員会、一九八九年

等々力ジートルンク 東京

森仁史

ワイゼンホーフから等々力へ ジートルンク・構想と挫折



はじめに

本章は現在の世田谷区中町一丁目に所在した蔵田周忠設計による四戸の住宅と、それらが当初の構想ではその一部となるはずであった「等々力ジートルク」構想の成立及びその日本住宅史上における意味を探ろうとするものである。

この計画は基本的に住宅設計の実験であり、従って計画には理念が直截に反映されていた。そこには、一九二〇年代に表現主義の洗礼を受けて建築家として自己形成を果たし、やがてインターナショナルスタイルに転進していった建築家の歩みの成果と蹉跌を汲み取ることができであろう。その一人であった蔵田にとり、かれの仕事の頂点を成し、日本の近代住宅の一つの帰結ともなったのがこのジートルクであり、そこから、日本建築のモダニズムの骨格を解析することができるとは言えない。

ジートルク構想

一九三五年三月号の『国際建築』誌上に、全三〇戸からなるジートルク建設計画が発表された。同様の記事は『新建築』二月号にも掲載されたので、少なくとも一月には準備が進められていたと思われる。

大都市の郊外発展と共に数を増す住宅の大群に対して、一定の技術的統一ある新住居区の計画的実現を希望する建

の当たりにはと思われ。

計画書原本は見つかっていないが、設計者の一人であった松本政雄（東京高等工芸学校卒業で蔵田の教え子、型型工房同人）のメモによって、もう少し詳細に計画を知ることができる。

……一九三五年二月恐らく日本の最初の計画ともみらるるものがあつた。……

等々力住宅区計画と称され、住宅三二戸を設けクラブハウスを付帯させる内容のものであつた。その時の計画書によれば、基本案として住宅、店舗（日用品店、食料品店その他）にバス発着所、汽罐室、変電所なども設備される計画であつた。

企画には久米権九郎、土浦亀城、山脇巖、蔵田周忠の名が連ねられている。

顧問として

ブルノ・タウト、吉田亨一、岸田日出刀、中村伝治、

技術顧問として

材料 市浦健、照明 遠山静雄

構造 田辺平学・十代田三郎

衛生・暖房・電気 桜井省吾の各氏

……

住宅各戸は統一あるジートルクとすること

各戸は仮定条件を別々に設定し、型の繰返してなく計画す

建築家が協力して、地区の計画から各戸の建築、並に設備の全般に亘つて、新時代に適應する模範を示したいといふ意気込みを以て、今回我国最初の統一あるジートルクが建設されやうとしてゐる。

この記事によると、目蒲電鉄所有の同大井町駅近くの等々力ゴルフ場に隣接する土地に同社開発部との協議を経て計画され、各戸は平均三〇坪を基準とし、設計者と区画番号（図①参照）は吉田鉄郎（一、二七）、久米権九郎（二、二二）、一九、岡村蚊象（山口文象（三、一七）、ブルノ・タウト（四）、蔵田周忠（五、二一、三〇）、山脇巖（六、一六、二五）、山田守（七、一八）、谷口吉郎（八、二二）、佐藤武夫（九、二〇）、市浦健（一〇、二九）、土浦亀城（一一）、前川國男（一二、二四）、斎藤寅郎（一四、三二）、松本政雄（一五）、堀口捨己（一六、二七）、土浦信子（一六）と発表された。

図面と模型の展示会を三月に開催して予約を募集し、工事完成を待つて秋には住宅展を開催する。その後、年賦で希望者に分譲するという計画であつた。これは蔵田と久米が中心になって立案推進していたもので、久米の姉婿が五島慶太であり、蔵田の勤務先の武蔵工業専門学校が東横資本と関係を深めていた事情などから、この二人に白羽の矢が立ったのであろう。久米は留学中の一九二七年にシュトゥットガルトの建築事務所勤務しており、恐らくワイゼンホフ・ジートルクの建設を目

ること

坪数は各戸三十坪以内

各戸当り予算左表の通り（最大仮定）概算以内とす

30坪×100=3000円	80"
	300"
	230"
	200"
計	3810"
	150"
	40"
計	4000"

建築電気暖房衛生垣

設計料備費

暖房、衛生、瓦斯、電気水道は中央統治の機関を設けること。（此の費用は各戸に按分すること）

建築家の選定や設備計画などからは明らかに第一次世界大戦後のドイツ、オーストリアの社会民主主義政府やソ連邦による都市住宅政策の影響が見てとれる。この計画は日本でのその理想的実現を目指そうとしていた。

しかし、この年の内にジートルク建設は中止となつてしまつた。その理由については、蔵田は「斯様な計画のためには余程こんな事は建築学会の役員とかその選挙とか事務手続きに馴れた人とか乃至は斯界の権威者でないともたらぬ」とあいまいに記している。だが、「感情上面白くない事もあり」、設計者の中から市浦、土浦、堀口、谷口らが途中で手を引いてしまつたために、計画が頓挫のやむなきに至つたというのが実相で

あった。そのうえに、「会社側の理解ある犠牲的精神なり真摯な投資を伴ふべき力の入れ方」も不足していた。

結局はワイゼンホーフ・ジートルンクにもっとも思い入れの強かった蔵田が自身に個人的な所縁のある施主を募り、四戸を設計し、五月頃竣工したのであった。すべて陸屋根のトロッケンバウ(乾式工法)住宅で、施工に当たっては土浦、十代田の助言を得た。蔵田からすれば、工法と建築設計としては当初のジートルンク構想で思い描いたものをかろうじて全うすることができた。

この計画は構想、実施住宅とも、工法としての乾式工法、建築設計としてのインターナショナルスタイル、住戸形式としてのジートルンクであった点で際立って実験的な性格を帯びている。これらの構想を成立させた背景を探ってみよう。

#### 蔵田周忠の自己形成

蔵田は一八九五年秋に生まれ、一九一一年頃上京し、一三年工手学校建築科を卒業した。翌年から三橋四郎建築事務所を経て、一五年には曾禰中條建築事務所勤務し、ここで高松政雄に薫陶を受けた。ドラフトマンとしては出色の才能だったのである。中條精一郎の引き立てが大きかったと思われ、例えばその紹介で、一九二〇年からは早稲田大学理工学部の佐藤功一のもとで選科生となった。この頃すでに建築ジャーナリズムでも手腕を発揮し始め、『建築評論』誌を早稲田大学の先輩であ



写真1 蔵田周忠ポートレート (1930年)

る中村鎮から編集者としてバトンタッチされていた。また、一九一五年の国民美術協会第三回展に「すまゐ」を出品し、建築活動も開始している。翌年三月三十一日から一年間平和記念東京博覧会工営課技術員となり、恐らくこれが機縁となって同年の分離派建築会に東大出身以外の最初の会員として迎えられ、この博覧会のためのプランを同会展に出品した。中條の仲介で森口多里編集による『建築文化叢書』全一二冊の内五冊を執筆し、なかでも『近代建築思潮』は「わが国最初の近代建築史の通史」として世評に高く迎えられた。

一九二二年には石本喜久治と仲田定之助が帰国後にパウハウス体験を発表し、その指導原理を日本に紹介し、既に分離派はアヴァンギャルドとしての地位を失っていた。蔵田にはその世代に共通な世紀末芸術風な総合主義的嗜好が強かった。この傾向は蔵田を関東大震災後に加速される生活改善の流れのなかで、「工芸」へと赴かせたのであった。蔵田は一九二七年から東京高等工芸学校工芸図案科で室内工芸を指導することになり、翌

年には移り住んだ同潤会代官山アパートの自室を根城に、パウハウスやドイツ工作連盟に影響されて機能主義デザインの実際同人組織「型而工房」を結成する道程は、この時期に美術・建築・デザインが互いに交錯していた時代状況を物語っている。その最初の成果は蔵田設計の石川邸(一九二九年)での室内装飾(絨毯・家具・ステンドグラス)に結実し、一部が一九二八年九月の第七回分離派展と、二月の型而工房室内工芸試作展に出品された。これを見ると、建築を含め、かれらの実践は未だに浪漫主義的・表現主義的であり、機能主義デザインは題目以上のものではなかった。それゆえ、蔵田にとってそれまで文字を通してしか知り得なかったデザインの転回点、即ちパウハウス以降のドイツの建築・デザインを直に体験することを急がねばならなかった理由がここにあった。

自身の設計に依る一九二六年の自邸に至るまで、表現主義的造型に彩られた木造住宅を一三棟設計していたとはいえず、蔵田にとって、その活動の拠点は雑誌『国際建築』を発行していた国際建築協会であった。このようにおもに文筆を生業とする蔵田にとって、それらを中断して旅立ったヨーロッパ遊学はまさに背水の陣であった。

#### ワイゼンホーフへの理路

蔵田は一九三〇年三月一三日、東京駅を出発し、シベリア鉄道を經由して二六日にベルリンに到着し、帰国間際の山田守と

落ち合い、かれの下宿に入れ違いに住み込むことになった。およそ一年三カ月の滞在はベルリンを拠点に各地の新しい建築を見学し、フーゴー・ヘーリンク、エルンスト・マイ、グロピウス、メンデルゾーンらの建築家と意見交換することに費やされた。その間に、さらにチエコスロヴァキア、オーストリア、ハンガリー(一九三〇年六月)、イタリヤ(同一〇月)、イギリス、オランダ(三二年四月)の建築と博物館美術館巡りに費やしている。いかにも精力的に新思潮を吸収しようとした様が窺える。パウハウスは都合三回(三月二十八日山田守と、五月に二人で、三〇年年末に大熊信行と)訪問し、その都度学生の案内を受けている。見たり聞いたりするだけでなく、一九三〇年夏から三カ月あまり、ベルリン西南のツェーレンドルフに建設されたばかりのオンケルトムズヒュッテ・ジートルンクの一角にある、ブルーノ・タウト設計による三層のジートルンクを選んで、その一室に友人と居住した。同潤会アパートを体験していた蔵田にとって待ち遠しい入居体験であった。

一九二七年にシュトゥットガルト市で、ドイツ工作連盟展覧会の開催が予定され、ミース・ファン・デル・ローエがその芸術監督となり建築展が準備され、ル・コルビュジエをはじめとする建築作家一五名が決定された。展覧会には二棟の建物が公開され、五〇万人の観客が押し寄せた。

日本では、上野伊三郎が早速この翌年に入居後の使い勝手を

含め、詳しく報告している。また、洪洋社から『建築写真類聚』の一冊として図版集が出版された。日本でも、これは新しい住宅造りへの「世界最新の試み」として熱い注目を浴びたのであった。<sup>\*27</sup>

蔵田がシュトゥットガルトにワイゼンホーフ・ジートルンクを訪れたのは三〇年七月であった。この訪問を蔵田はこのほか印象的な体験として書き残している(図2参照)。

ワイゼンホーフの……丘の一角の新鮮な雰囲気と、これに包まれたこのテラスセにあって眺望しながらの朝食を好んで、私はこの丘に登って来るのだった。

一九二七年に出来たこの住宅の一群は、スツットガルト中で最も特色ある一廓をなしてゐた。私はこの一廓を一巡する度に考へ込んでしまふ。この二十幾棟が全群が、よくかくも多数の一流建築家の協力に成り、その上、様式上の協働の進出がかくも総合的に達成されたことを感心する……。

「ワイゼンホーフ・ジートルンク」この一廓にはじめてこんな新しい試みを、統一的に仕上げた人達を、尊敬もし羨みもする。<sup>\*28</sup>

これが等々力ジートルンク建設への蔵田の直接的な動機となつてゐることは間違いないが、その際いみじくもここで蔵田が

ルビュジエをはじめとする近代主義陣営は国際的に焦眉の課題を議論し、日本のモダニズム建築家にも大きな影響を与えていた。蔵田の渡欧前年の一九二九年、フランクフルトで第二回会議が開かれ、そのテーマは「最小限住宅」であった。現代生活に求められる住宅の合理的設計が検討され、報告書が出された。三一年にブラッセルで第三回会議が開かれ、このときは高層住宅の提唱、「成長する家」Wachsende Hausに議論が集中した。住宅が量的な供給から現代生活の理想追求とそれを満たすための機能を実現することが現実問題として特にドイツでは積極的に追求、提案された。集合住宅や主婦の負担を軽減する台所がフランクフルトをはじめ各地で造られた。一九三二年のベルリン夏季博覧会では住宅の工業的生産を可能とする工法として「トロッケンバウ」が提唱された。<sup>\*31</sup> これらの問題提起はどれも蔵田をはじめとする日本の若い建築家にとって切実で、同時に日本でも解決を迫られた問題であった。

一九三一年六月一九日、予定を早めて帰国した蔵田は、年末に代官山アパートから指呼の間の渋谷町猿楽に転居し、設計事務所を開設した。二月に土浦亀城邸を訪問し、『型而工房ラポルト』の出版予定を告げた。また、この年から武蔵工業専門学校教授に就任した。

彼が帰国後、最初に力を入れて活動を展開したのはトロッケンバウであったが、それには二つの理由があった。一つには、国際建築協会は商業ベースに立って、新しい建築材料の研究に

「総合的」と形容していることに注目しておく必要があるだろう。蔵田はこの一月後にダルムシュタットのマナルダの丘を訪れ、芸術家村についてはまさに信仰告白ともいえる一層思い入れの強い感銘を記している。

#### ダルムシュタット

近代建築史ではモニユメンタルな都市だ。——否都市自身としてはそうでもないが、中に私の見たい建物の重要なものがある。

#### マティルデンホーエー!

エルンスト・ルードワイヒ大公成婚記念塔と展覧会場とそれにつづく芸術家住宅群を、私は静かに歩いた。が涙は流さなかつた。<sup>\*29</sup>

蔵田は一九二六年の第五回分離派建築展に「住宅の一群」と題して自己がそれまでに設計建設した八棟の住宅・教会によって形造られた街区を出品していたことを指摘しておきたい。③。ジートルンクの社会政策的な必然を知るかなり以前に、自らの志向を束ねる場としての住宅区の構想を蔵田は早くから抱いていたのである。また、ワイゼンホーフをも芸術家村的な総合的ユートピアの伝統の文脈で捉えようとする素地が蔵田には十分すぎるほど備わっていたのである。

一九二八年に近代建築国際会議CIAMが結成され、ル・コ

関してかなり実際的に関わっていた。同人に業者を交えて建築材料研究会が設けられ、塗料(日本ペイント)、焼付漆(日本漆工業所、銅管家具(YSY)、壁材(ラジテックス)、石材(八雲トラバリーチンほか)などについて最新技術の撰取と討議が展開されていた。この顔ぶれは素材により変化するが、同人に加えて型而工房や後述のトロッケンバウ研究会のメンバーが加わっていた。第二には、コンクリート建築の見直しを背景に、乾式構造は建築工事期間の短縮と工業生産による効率化をもたらし、それによって低価格化が期待され、折からの不況下で経済的に豊かとはいえない中間層の需要に応えられると考えられていたからである。

この時期、市浦健、土浦亀城らによって主張されたローコストの「民主主義的建築」<sup>\*32</sup>は、蔵田からすると型而工房の生産効率性と機能美の両立という活動目標とも一致するものであった。その実現には「従来のどの住居群にも入れることの出来ない内容的特性と、それに適合する現代の外観を持つ」ジートルンクこそふさわしいと蔵田は考えた。さらに、「成長する家」概念に照らしても、家族構成にみあった増築に対応しやすい利点があると主張された。<sup>\*34</sup> 蔵田はヨーロッパ各地を巡礼しただけでなく、社会民主主義政権のもとで新進の建築家が推進した集合住宅設計に確実に影響されており、この乾式工法によって日本の建築の変革を目指そうとした。

一九三二年夏に日本トロッケンバウ研究会が青山忠雄、市浦



健、井上房一郎、蔵田、川喜多煉七郎、土浦亀城をメンバーとして結成され、一二月から講習会が始められた。<sup>35</sup> 実際の乾式工法の住宅はこの時期に数多く建てられた。デザイン的には石綿スレートもしくは下見板張りや陸屋根によるキュービックな外觀は、日本におけるインターナショナルスタイル住宅の誕生を力強く宣言するものであった。等々力ジートルンクはこの最盛期に位置するものである。一九三〇年代建築の一翼を構成し、<sup>36</sup> どんな建築家がこの方法論に関心をもって挑んだかが見て取れる。

- 一九三二年 土浦亀城設計五反田自邸、井上房一郎設計田中医院、市浦健設計自邸
- 一九三三年 友田薫設計穂積邸、市浦健設計坪廿四の別荘、山越邦彦設計自邸
- 一九三四年 梅田良雄設計林是邸
- 一九三五年 土浦亀城設計自邸・高島邸・今村邸、市浦設計自邸
- 一九三六年 本野精吾設計本野邸、谷口吉郎設計住宅、等々力ジートルンク
- 一九三七年 蔵田設計白柱居、山口文象設計小林邸、土浦設計田宮邸、谷口設計K氏邸

蔵田は建築材料の研究の進められていた一九三三年の五月六月に長期入院を余儀なくされ、最初のインターナショナルスタイルの住宅は翌三四年の内田邸であった。この時はまだトロツ

が残りの一戸を受け持つことに決まった。初め建築家諸君は、私に『第一号』を割当てようと申出てくれたが、私は仲間の人として参加したいからと言って、特別の配慮を辞退した。そして「ちよつと惜しかったが、『第一号』は吉田（鉄郎）氏に譲ることにした」。<sup>37</sup> これも『国際建築』の記事通りである。とすれば、表面に現れていないものの、このジートルンク構想に果たしたタウトの役割はかなり決定的だったといえる。また、三月四日の建築家の会議で「いろんな設計が持寄られたが、私の設計は、この国の風土に十分な考慮を致している点で、諸君の興味を惹いた様子」であったと書き記している。別なところでタウトは日本での建築の要件を「一、窓には必ず庇を設けねばならない。二、窓はできるだけ風を通すように設計しなければならぬ」<sup>38</sup> と述べており、こうした指針は蔵田の設計に大きく影響を及ぼしたと考えられる。

住宅地開発との関わり

等々力ジートルンクの敷地は世田谷南部にあって、東側は谷津川に沿った崖になっており、南は等々力ゴルフ場に隣接して全体として緩やかに南に傾斜した標高二〇メートル程の多摩川の河岸段丘上に位置している。一九二九年一月に開通した東京横浜電鉄大井町線等々力溪谷駅からは徒歩で十分程度の距離で、ここから渋谷へは電車で三〇分程度で行け、東京近郊の住宅地としては恵まれた環境にあったといえよう（図4）。

ケンパウではなく、木造モルタルであったし、翌年の福沢邸でも同様であった。

タウトの影

ブルーノ・タウトの来日は、上野伊三郎らの日本インターナショナル建築会の招きによるものであった。タウトは一九三三年五月三日に敦賀に上陸し、桂離宮を検分し、二日には蔵田邸に滞在している。そして、久米権九郎と蔵田はタウトの就職先を国立工芸指導所、大倉陶園、井上工房と世話をし、相談にのっていた。一九三三年にタウトにより計画された生駒山嶺小都市計画は翌年四月に実現しないことが事実となったが、一九三五年一月一六日に久米と蔵田はタウトに三〇戸のジートルンク計画への援助を依頼している。これに対し、タウトは積極的に提案を行い、二月一四日には二列の「一戸建住宅群」は「戸数は全体で三十一戸、建築費は一戸當り三、四千円で、一個所の中央暖房装置から各戸に温熱を配給する。樹木の鬱蒼とした美しい谷に手をつけずに敷地計画を立てたのは、私の提案によるものである」と記している。計画が公表される半年前に久米、蔵田は真つ先にタウトに相談したかったのであろう。現地を検分したらしいタウトの計画を読むと、松本メモにあった構想の多くの部分がタウトに依っていることが明らかである。

建築設計については、「十五人の建築家が各々二戸ずつ、私

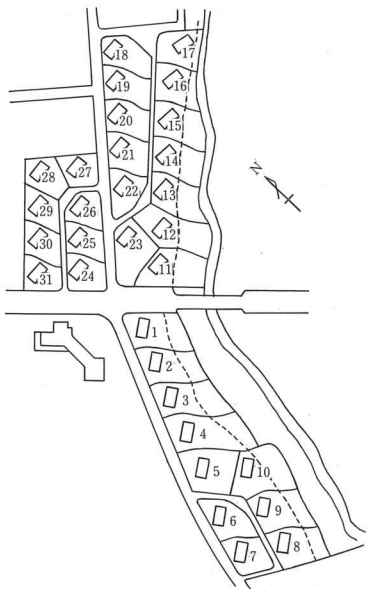


図1 新住居区計画

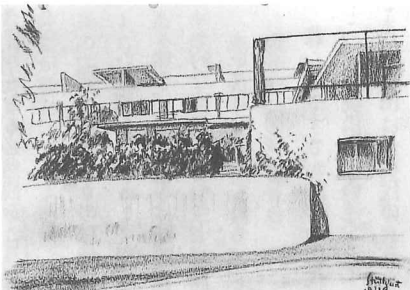


図2 蔵田周忠「ワイゼンホーフ・ジートルンク」(1931年)



図3 蔵田周忠「住宅の一群」(1926年)

すでに一九一八年、田園都市株式会社が玉川村の宅地化に着手していたが、その後、区画整理による宅地化の動きが加速される。一九二六年に世田谷でもっとも大規模な玉川全円耕地整理組合が創設された。同組合によって、この等々力地区では一九三〇年から耕地整理が開始され、一九四四年までに全部で一〇〇町歩を耕地整理した。世田谷区全域では、一九二七年から三三年までに二二組合によって一八一〇町歩が区画整理された。<sup>39</sup> 等々力ジートルクの計画もこうした地域の住宅地開発の波に乗った計画の一つには違いない。整理組合の事業進行にや先駆けした電鉄会社の地域開発と見なすことができる。

#### 実現された四戸の住宅

一九三六年五月頃に当初計画の第一一・一四・二三区画にあたる部分に四戸が建設され、施工にはすべて坂本省吾があたった。

これらの住宅を、例えば日本の代表的なインターナショナルスタイルの住宅である土浦邸がキュービクなフォルムを極力保って、壁面の凹凸を抑え、そこに最小限の窓やドアを取り付けるのに比較すると、蔵田の住宅は複雑な内部構成をスレートでくるみこんだために、入り組みの多い直方体の連続といった趣を見せている。また、庇や入り組んだ出入りの多い壁面はむしろ構成主義的印象を与え、二〇年代的といってもよいように思える。蔵田は自身の設計する住宅がインターナショナル

スタイルとなる必然性をこう説明している。

例へば間取りの融通性、室内の整頓と清澄さ、そして広い縁側を伸介として庭園に繋がる広闊さ、材料の使用の自然さ。―これ等は同時に現代住宅のねらひ処である。現代的な特色をもつ住宅が日本の伝統を理解する人にわからない筈はないのである。<sup>40</sup>

暮らしやすさが材料の現代性と結んで生まれるものが蔵田にとつての現代住宅のインターナショナルスタイルなのである。これを蔵田は「現代のクラシック」と呼んでいる。タウトの影響と思われるが、日本の夏の通風性、日光への対処と射入、和室(畳敷)と洋間の調和に配慮が払われた。居住者からの聞き取りによると、夏にも四方から風が通りしるのぎやすかつたようであり、開放的な間取りや通風のための小窓が効果的だったようである。

これらの日本人の生活から得る現実的欲求に応えることを優先する住まいこそが蔵田の設計の根幹であった。この意味で、蔵田はアヴァンギャルドというより、あくまで生活者感覚に拘泥する現実主義者であった。そのために、理念としての国際建築というよりは建築の「型」としてそれを援用することに自由だったのである。あるいは、ダンスでなく謡曲を好む体質のゆえであったと言えるのかもしれない。<sup>41</sup>

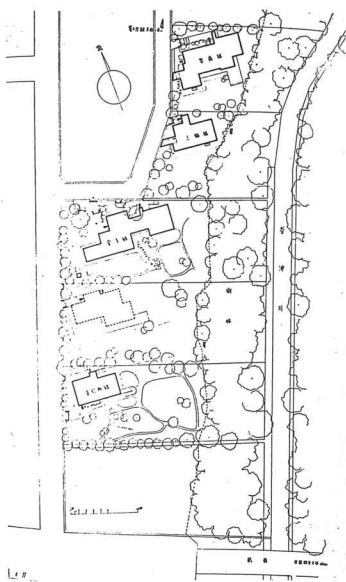


図4 等々力ジートルク配置図



写真2 等々力ジートルク全景



写真3 北側から見た等々力ジートルク

不均等なガラス戸棧は庭との連続を感じさせるよう視線を遮らないための工夫であった。蔵田の住宅ではほとんど例外なく芝生の平庭が設えられ、低いフェンスで外部への視線の連続性を保ち、住宅に開放的な印象を与えた。またフラットな芝生面は四角い住宅とのデザイン的な取り合わせ、庭やテラスでの家族生活の展開などが考慮されていた。外観はスレート生地のままた灰白色でネジもそれに合わせて白ペンキで塗り、棧はすべて茶色ステンポイル塗りとし、色彩計画についてはタウトの先例に倣わなかった。

また、厨房は白いタイル張りの壁に造りつけの収納棚、調理台が清潔感を引き立て、基本的にガス台と流しを隣り合わせて配置し、その背面に食器棚が造りつけられ、設計者が意図したようにその合理性が主婦を喜ばせた。

以下に各住宅の概要を述べておこう。

#### 金子邸(図⑤、写真④)

施主の金子義寛は東京高等工芸学校木材工芸科の一九三四年卒業で、東横百貨店洋家具部に勤務する蔵田の教え子の一人であった。家具、カーテンは施主が選定した。写真にはブロイヤーらしきカンチレバーのパイプ椅子とパイプ脚のガラステーブルの応接セットが見える。後に、金子邸は売却され、戦後は居住者が替わった。その際、玄関ホール脇の女中室が取り払われ、玄関床のタイルは鉄平石に替えられた。厨房を食事室まで広げ、

プールをつぶしてホールが広げられた。一九九八年に取り壊された。

齋藤邸 (図⑥、写真⑥)

施主の齋藤誠一は金子と同窓の工芸図案科卒業生で、初め大倉陶園に勤務した。この当時は太平洋美術学校に在籍していたが、目立った出品歴などの画家としての経歴は見出せない。しかし、定法どおり北に面した広い窓と西日を遮る軒を持つアトリエを中心とした間取りである。家具などは東横百貨店洋家具部で製作した。写真を見るとアトリエにパイプ椅子が配されている。夫婦と母親が居住。

齋藤家は二代目までここに居住し、表入口は車庫を造る際に取り壊された。アコーディオンカーテンで仕切られていた食事室と居間は後に壁で完全に区切られた。金子邸、古仁所邸にも設置された陶製の日時計がここにだけ残った。

三輪邸 (図⑦、写真⑦)

施主は齋藤の親類で、老夫婦の隠居所として建てられた。関西から転居するため、ほとんど設計に注文は付かなかったようである。齋藤邸と共同の浄化槽を設置した。理想的には全戸を共同化すべきと考えたが、これは実現しなかった。

三輪家は三代目までここに居住し、居住家族員数が増えたので南側に渡り廊下でつないだ八畳間一棟を増築し、さらにその

上に二階を増築した。厨房が狭かったので茶の間を板敷きにして拡張した。玄関東側に応接間を増築した。三輪邸、齋藤邸は古仁所邸調査の際には健在であったが、その後、取り壊されたようである。

古仁所邸 (図⑧)

施主は金子氏と同じく東横百貨店家具部に勤務していた。居間の暖炉の上に貼られた拓本は施主所蔵のものから、蔵田がこの泰山経石峪拓本を選んだ。家族三人と女中が居住。

居間に続く食堂に襖を立てて、四畳半の畳敷きに改造した。内壁はテックスに壁紙を貼って遮断性はよかったが、鼠が中を走りまわったようである。屋上の手すりや街灯は戦時中に金属供出された。子どもの成長とともに収納スペースが不足し、二階の書斎の書庫を取り外して、地下に移し、箆筒を入れた。

古仁所邸は一九七三年に取り壊されたが、この直前に武蔵工業大学広瀬研究室によって調査(都市住宅「七三〇七所収」)が行われた。

陸屋根のシンダー・コンクリートの性能が良くなって、壁材のジョイナーの精度にも問題があり、度々の雨漏りに悩まされ内装が傷んだ。しかし、陸屋根の利点として蔵田が意識して設けた屋上テラスは住人の満足を得たようで、地面から大空に向かう生活空間の広がりや健康さを満喫したようである。

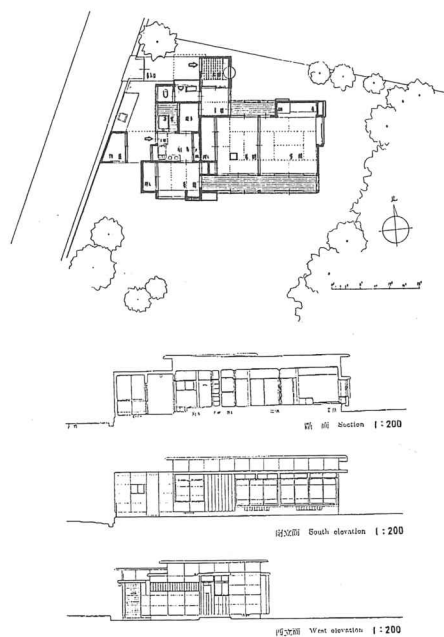


図7 三輪邸 平面図、立面図

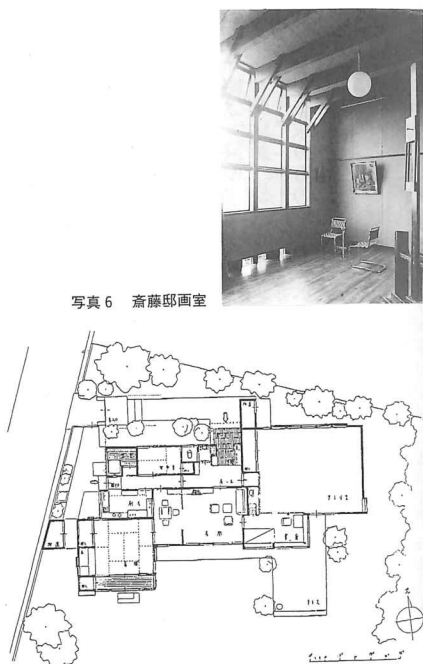


図6 齋藤邸1階平面図



写真6 齋藤邸画室



写真4 金子邸居間



写真5 金子邸ホール

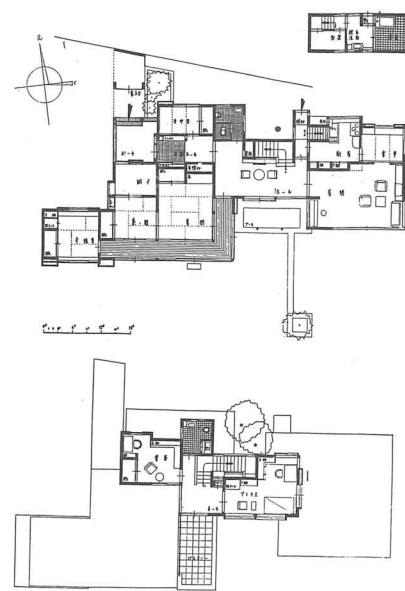


図5 金子邸 1階・地階平面図(上)、2階平面図(下)

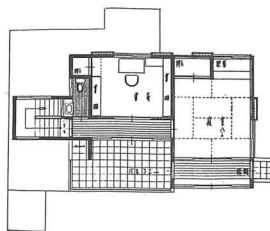
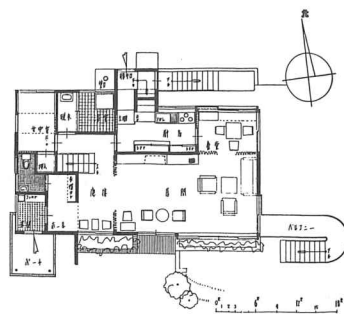


図8 古仁所邸 1階平面図(上)、2階平面図(下)

暮らしのモダニズム

蔵田周忠はこの後も、貝島邸、白柱居とトロッケンバウ住宅を造りつづけた(すべて現存せず)。一九三九年のインターナショナルスタイルの田中邸以後は、建築家としてはほとんど活動していない。これらほとんどすべてが住宅設計であったことは特徴的である。

蔵田の設計活動は建築の芸術表現としての模索と確立からインターナショナルスタイルへの転換期に重なっていた。このとき暮らしたの姿は理念としての建築を転換させるまでに到っていたのだろうか。蔵田ととりわけ近しかった今和次郎は一九四四年の著書のなかでこれを振り返って、この根源が「経済主義衛生主義の上に立った合理主義」に基づく生活改善運動であり、その住宅改善要綱による文化住宅での「西洋流の生活」が営ま

れたが、因習打破では習慣を変えることはできなかったと総括している。<sup>\*43</sup>

一九二八―二九年の『国際建築』誌上の蔵田と『デザイン』誌上の伊藤正文、竹内芳太郎とのインターナショナルスタイルの様式化をめぐる論戦で、蔵田は「或る共通形式に到達しなければならぬ理論を持つことになるのが、国際的な新建築の道筋」だと主張していた。こうした蔵田の姿勢は渡欧前から変わらなかったし、暮らしたの近代化からの設計をインターナショナルスタイルに帰結させ、生産効率化や低価格化にトロッケンバウを導入したのが、蔵田の等々力での基本姿勢であった。それは日本の暮らしたに基軸を置いてそれにふさわしい型を選び取るというスタンスにおいて、西欧の模倣ではない日本のモダニテイの形成への一つの可能性を孕むものであったが、夢は夢として潰え、やがて四〇年代の戦時の暮らしたにふさわしい住宅へと転換されていくことになった。設計における蔵田の現実主義は暮らしたの次元から視線を動かさず、国際建築(インターナショナルスタイル)を「型」的な形式として選ぶのにやぶさかではなかった。また、その立場ゆえ住宅設計に精通し、その頂点に等々力ジートルンクの夢が位置するのである。理念型としての国際建築を追い求めるのではなく、日本人の現実生活の個々の欲求とその生い立つ風土に拘泥する姿は、工手学校生から時代を風靡する建築家となっても等身大を超えない蔵田の意志であったろう。等々力の実験はそうした蔵田の設計思想が時代と切り結

んだ様を如実に表明しているように思われる。

註

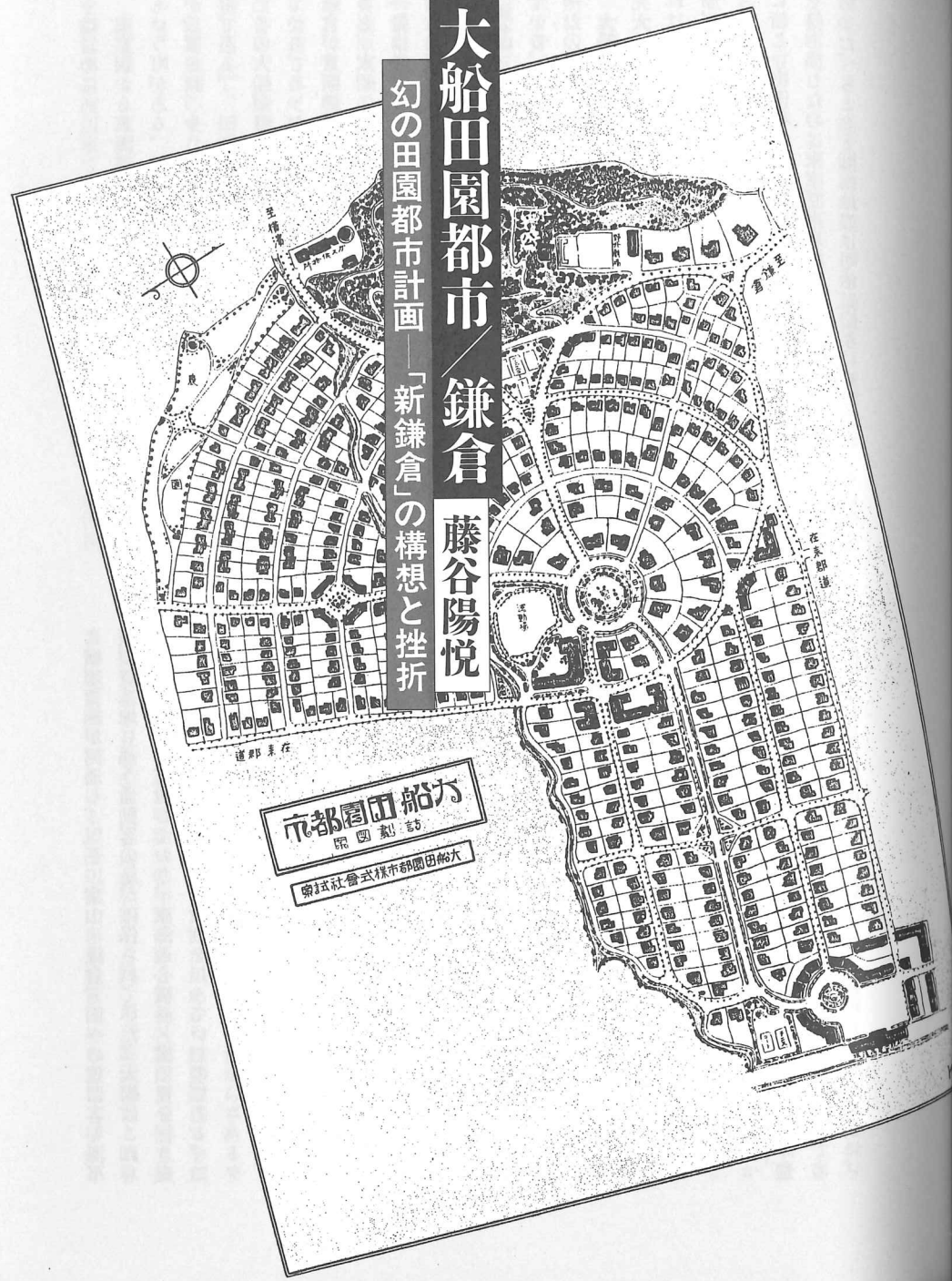
- \*1 蔵田周忠「等々力住宅区の一部(以下「等々力」と略記) 国際建築協会 昭和十一年、一―二頁。蔵田は当初の夢が実現しなかったがゆえにこの建築報告書に「一部」と題したのであろう。本稿ではこの蔵田の意を汲んで、あえて実現しなかった計画全体を指す呼び名として「等々力ジートルンク」を採用することにした。この著作は『国際建築』第二巻第六八号掲載の図版、論述をまとめたものである。この他に「住宅」第二巻一―月号に金子邸の論文が掲載された。
- \*2 梅宮弘光「日本におけるパウハウス受容とアヴァンギャルドのエートス」『パウハウス』一九一九―一九三三、図録、セゾン美術館、一九三五年、三四七―三四八頁。
- \*3 『国際建築』第一巻第三号、一一〇頁、『新建築』第一巻第二号、四〇頁。後者の記事ではどうした訳か蔵田の名前が除かれ、設計は一五名が各二棟を担当するとされている。
- \*4 『新建築』第一巻第二号、四〇頁。
- \*5 久米は一九二八年ジュットワットガルト州立工科大学建築科を卒業している。久米権九郎追憶誌、久米建築事務所、一九六六年、四四二頁。蔵田は福沢邸施工の際に久米に指導を受けていた。
- \*6 松本政雄「工房設立と当時の建築的事情(青春の道標)」(一九七六年頃)『等々力』一頁。
- \*7 『等々力』一頁。
- \*8 市浦健「久米先生を悼む」『久米権九郎追憶誌』前掲、六五―六六頁。
- \*9 村松貞次郎「日本建築家山脈」鹿島出版会、昭和四〇年、二二七頁。以下、蔵田の初期の経歴は同書に依る。
- \*10 蔵田周忠「中村さんと私」『新建築』第九巻第九号、一八四頁。蔵田は一九二三年から東洋コンクリートに勤務しているが、これは雑誌編集を通じた中村からの紹介かもしれない。
- \*11 「国民美術協会第三回年報」。現在確認できる最初の出品歴はこの国民美術協会展で、中條が会長であったことによるものと推察される。このほか、同年末には山中商会募集の米岡住宅設計図案競技にも当選している。『建築画報』第八巻第四号。また、ミネルヴァアンサイアテイ展には後出の山中節治と出品している。『美術月報』第一巻第一号。

- \*12 『平和記念東京博覧会事務報告』下、大正一三年、東京府、五九二頁。
- \*13 工手学校卒業以外に全く学歴のなかった同人は蔵田のほかにはいない。この時の出品作は「丘の上の展覧会場」、「奏楽堂」で、後者は第二会場の第二音楽堂として実施された。「分離派建築会作品集」第二、岩波書店、一九三一年。
- \*14 浜岡(蔵田)周忠「近代建築思潮」洪洋社、大正一三年。村松、前掲書、二二五頁。
- \*15 ただし、「図案実習」の講師は無給であった。しかし、美術学校図案科出身の池辺義教も同人に引き付けられるほどに蔵田の影響力は大きかった。
- \*16 拙稿「造型の明澄と清楚 一九三〇年代の工芸とデザイン」『へかたち』の頒分、東京国立近代美術館、一九九八年。
- \*17 『建築新潮』第九年第二号、『国際建築』第五巻第二号。
- \*18 『建築画報』第二〇巻第一号。
- \*19 一九二九年一月に『建築紀元』、『建築新潮』、『建築時代』が相次いでパウハウス特集を発行していた。
- \*20 蔵田が自身の設計で渡欧前に完成させたものも大規模な建物は、新潮社社長佐藤義亮の自邸月華荘であり、これは桃山風の純和風建築であった。「住宅月華荘」洪洋社、一九三〇年。
- \*21 『国際建築』と改題されたのは一九二八年からで、同年一月の時点の同人は青山忠雄、蔵田、山中節治、濱田義男、三宅勤、三浦元秀、明石信造、菅原榮蔵、小山正和、野呂秀夫、能勢久一郎、丹羽美岡、長根、桑原、三澤であった。『国際建築』第四巻第二号、三三九頁。
- \*22 『国際建築』第六巻第二号。蔵田周忠「欧州都市の近代性」(以下、「欧州都市」と略記)六文館、昭和七年。蔵田文庫メモ(武蔵工業大学図書館)。
- \*23 この滞在や旅行中に彼が出会ったり協働したのは山田守、今和次郎、山脇巖、大熊信行、津田鑿、旭正秀などである。
- \*24 ベルリンで三月月行動をともにした山口文象の「フォルムのカッコいいものだけを訪ね歩いた巡礼」という批評は現象的には的外れではないであろう。佐々木宏編「近代建築の目撃者」新建築社、一九七七年、一七三頁。
- \*25 『欧州都市』七、八一八〇頁。
- \*26 ギャラリー・タイセイ編「モダンハウジングの実験場」ワイゼンホーフ・ジートルンク1927。ギャラリー・タイセイ、一九九七年、四、九―一頁。



9

大船田園都市 鎌倉 藤谷陽悦  
幻の田園都市計画 「新鎌倉」の構想と挫折



- \* 27 上野伊三郎「スワットガルトの住宅展覧会建物の実験成績」『デザイン』第二年第一号。「新時代の住宅1」、洪洋社、一九二九年。Bauer and Wohnen及びImcraunから翻訳し、二四棟を図版で紹介、川喜多煉七郎が解説。
- \* 28 「欧州都市」二二二―二三三頁。この個所を雑誌掲載論文と較べると、ダルムシュタットの項よりもっと変更が大きく、論点が整理され分量も四倍くらいになっている。以下のパラグラフは単行書では省略されている部分であるが、蔵田の感覚として重要であらう。「併し此所はまだ一種の個別的住宅の集合である。私は後でダルムシュタットのマティルデンホエエを見て、是等の住宅群の社会的連繫と因果関係とを考へさせられた。」「国際建築」第六卷第九号
- \* 29 蔵田周忠「国際雑記」13。「国際建築」第六卷第九号、二七頁。後に再録された「欧州都市」のなかで最後の一節が以下のように変更されている。「私は静かに歩いた。厳粛ではあるが、この丘の空気と共に清澄な心持ちだった。雑誌掲載時の記述が蔵田の心情により忠実なように思われるこちらを引用した。
- \* 30 「建築新潮」第七年第三号
- \* 31 蔵田周忠「現代建築」後編、東学社、一九三五年、五二―五三頁に蔵田の要約が掲載されている。
- \* 32 市浦健「一九三二―一九三三」「国際建築」第九卷第一号、三二頁
- \* 33 蔵田周忠「ゾードルンクの新形態」板垣鷹穂・堀口捨己編「建築様式論叢」六文館、昭和七年、三二―三三頁
- \* 34 蔵田周忠「Waldensé Hausのつと」『国際建築』第九卷第七号、二二―二四〇頁
- \* 35 「国際建築」第八卷第八号、一〇頁、第八卷第二二号、四九五頁。『アイシーオール』第三卷第二号、一―八頁。「建築と社会」第一九年第三号
- \* 36 「新建築」第九卷第一〇号、第一〇卷第三・七号、第一卷第三・六号、第二卷第六号、第三卷第四・八・九号、「国際建築」第八卷第一二号、第九卷第七号、第一二卷第二・六・七号、市浦健「乾式住宅の話」『婦人之友』第二七卷第一〇号。「新しい構造の家」洪洋社、昭和八年に内外の施工例が紹介され、川喜多煉七郎が解説を執筆している。
- \* 37 ブルーノ・タウト（篠田秀雄訳）『日本―タウトの日記』一九三五―三六年、岩波書店、一九七五年、一八、三八頁
- \* 38 同右、一九三四年、三四五頁
- \* 39 「世田谷近・現代史」世田谷区、一九七六年、六一―七四九、七六一頁

- \* 40 蔵田周忠「陸屋根」相模書房、一九三〇年、九頁
  - \* 41 藤森照信「昭和住宅物語」新建築社、一九九〇年、二九―三〇頁
  - \* 42 「国際建築」第一六卷第九号。このほか、やはり東京高等工芸学校工芸図案科出身の山崎幸雄郎があるが、これは純和風住宅である。
  - \* 43 今和次郎「暮らして住居」三國書房、一九四四年、一四七―一五二頁
  - \* 44 蔵田周忠「国際雑記」『国際建築』第四卷第二二号
  - \* 45 戦後に暮らしを追い越す規模やテンポが設計に求められるとき自ら逸脱するよりなかつたのかも知れない。
- 図版出典  
図2 武蔵工業大学図書館蔵  
図3 「建築新潮」第七年第三号

郊外住宅地年表..... 編集:池上重康 協力:恒岡律子

西暦	年号	郊外住宅地開発	関東圏	関西圏	その他	社会背景
1872	明治5	官設鉄道(東京新橋~横浜桜木町)開通/[東京]西片町貸長屋許可願(阿部家)				
1874	明治7			官設鉄道(大阪~神戸)開通		
1880	明治13	[那須]政府高官華族による農場別荘の建設				
1881	明治14	日本鉄道会社設立				
1883	明治16	日本鉄道会社(上野~熊谷)開通		大阪紡績会社操業開始		
1885	明治18			阪堺鉄道(難波~大和川北詰)開通		
1886	明治19					造家学会設立
1887	明治20	鎌倉海浜ホテル創業/[箱根]箱根離宮		関西鉄道会社設立/大阪鉄道会社設立	釜石鉱山田中製鐵所設立	私設鉄道条例
1888	明治21	東京市区改正条例/横須賀線開通		阪堺鉄道(難波~堺)開通		市制・町村制
1889	明治22	[藤沢]鷗沼別荘地(伊東利行)		大阪市市制施行	呉鎮守府開庁/九州鉄道(株)設立	鉱業条例/東海道本線(東京~神戸)全通
1890	明治23	[東京]神田三崎町(三菱会社)		琵琶湖疎水第一期工事完了		米騒動/軌道条例
1891	明治24					濃尾大地震/日本鉄道(上野~青森)開通
1892	明治25					鉄道敷設法
1893	明治26			摂津鉄道(尼崎~池田)開通(後の阪鶴鉄道)	[新居浜]住友下部鉄道開通	
1894	明治27	甲武鉄道開通、玉川砂利電気鉄道設立				日清戦争勃発/『日本風景論』(志賀重昂)
1895	明治28			南海鉄道設立/大阪城東線開通/京都電気鉄道開通	台湾総督府(台湾/台北)設立	日清講和条約調印、台湾を植民地とする
1896	明治29			高野鉄道設立/鐘ヶ淵紡績兵庫工場開業	名古屋鉄道設立	製鐵所官制
1897	明治30			大阪市第一次市域拡張/大阪馬車鉄道設立/阪鶴鉄道開通/南海鉄道(堺~尾崎)開通	官営八幡製鐵所設立	日清戦争戦後恐慌(第一次)
1898	明治31	『武蔵野』(国木田独步)		南海鉄道、阪堺鉄道より事業譲渡を受ける/河陽鉄道(松原~古市)開通(後に河南鉄道を経て大阪鉄道)	名古屋電気鉄道開通	『明日—真の改革に至る平和な道』(E・ハワード)
1899	明治32	[軽井沢]鹿島の森(鹿島岩蔵)/[御殿場]二の岡亜米利加村(R.S.バンディング)			[八幡]構内に高見高等官舎建設	耕地整理法
1900	明治33			[神戸]村山龍平、御影に土地購入	台湾市区改正/[台湾/高雄]大日本製糖が新式の製糖工場を設立	日清戦争戦後恐慌(第二次)/下水道法
1901	明治34	[東京]舎人耕地整理組合設立			官営八幡製鐵所操業開始	
1902	明治35				台湾糖業奨励規則	『明日の田園都市』(E・ハワード)
1903	明治36	東京信託社設立(岩崎一)		大阪市営電気鉄道(花園橋~築港棧橋)開通/南海鉄道(難波~和歌山)開通/新淀川開通	名古屋電気鉄道(久屋町~千種)開通	『家庭之友』創刊(羽仁夫妻)
1904	明治37					日露戦争勃発
1905	明治38			阪神電気鉄道(大阪出入橋~神戸三宮)開通/打出浜海水浴場開設(阪神電鉄)/浜寺海水浴場開設(南海電鉄)[神戸]この頃より阿部元太郎、住吉村、観音林・反高林で土地分譲開始	大連市家屋建築取締規則施行/[吳]呉海軍長官官舎新築	日露講和条約調印、関東州(遼東半島南部)を租借地とする

近代日本の郊外住宅地

発行 二〇〇〇年三月三〇日 第一刷  
 二〇〇一年五月一〇日 第二刷

編者 片木篤十 藤谷陽悦 十角野幸博

発行者 井田隆章

印刷 図書印刷

製本 富士製本

装幀 田淵裕一

発行所 鹿島出版会 107-8345 東京都港区赤坂六丁目5番13号

電話 〇三(五五六一)二五五〇 振替 〇〇一六〇二二一八〇八八三

無断転載を禁じます。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。